

1975 昭和50年11月30日

鶴研

単行本 「この愛 (かな) しきもの」 草柳大蔵

初出 主婦の友S49年4月号

見出し[背中のある男 あるいは 小野栄一]

筆者[草柳大蔵]

背中のある男 あるいは小野栄一

声の大きすぎる曠野の虎

小野栄一。海軍少尉で復員。闇屋がはびこり、日本の女性がアメリカ兵に操を売る世の中にびっくりする。「じょう談じゃねえや。こんどの戦さはこんなものだったのかい」と、青竹をもって浜松の町をねり歩くようになる。そんな彼を見かねて、縁戚の人が芸能界に世話をしたが、その最初にめぐりあった人が高田浩吉である。最初は付き人として「走りづかい、からはじめ、のちにマネジャーのような仕事までやった。師匠の「役者紋」が鶴。それに高田浩吉の真ん中の二字、田浩を貰って鶴田浩二となる。ほんとうは師匠が「おれを継いでくれよ」と、「浩次」にしようとしたが、小野は「いえ、とんでもないことです」と、自分で「浩二」にしてしまった。

略 -----

戸籍の「よごれ」が手足に鎖を結ばせた

略 -----

昭和19年5月、小野栄一は徴兵検査で甲種合格となり横須賀海兵団に入隊した。海軍2等水兵で、通信・砲術・航海等を叩きこまれ、「まるで牛や豚のように追いまわされ、ぶちのめされる毎日」を送った。これは敵 (かな) わじと、飛行科を志願した。5度受験して6度目にとおった。なにも海軍飛行予備学生を憧れたわけではない。牛や豚のような生活から逃げ出したかったのだ。土浦の航空基地で教育訓練を受け、少尉候補生になった。その「拜命式」の前日だった。分隊長 (陸軍でいうと小隊長) に呼ばれた。

「小野、貴様は皆とは別に大井空にゆく。いいか。貴様のせいではないんだぞ。動揺せずに、しっかりご奉公せい」肉親に犯罪人や花柳界に関係するものがあるもの、正妻の子でないもの、これらは特別な扱いを受けた。

小野少尉候補生も、身上調書のうえからは「適格者」とはいえなかった。彼が物心つかぬうちに母は再婚している。前夫は無職の遊び人である。小野がそれを知ったのは中学2年生のときである。学校に戸籍謄本を届けることがあり、母があまり何度も「封をあけずに先生にわたすんだよ」といったのに疑念を持ち、あけてみると「お父さん」と呼んでいる人は実父ではなく、自分が「連れ子」とわかったのである。せめて高専くらいの年齢になっていれば気持ちを整理する能力もあったろうが、なにぶん中学2年生である。悩むよりも、母に欺されたという思いが先に走り、以来、小野は社会に白眼を剥いて幼い抵抗をはじめようになる。1年生のときも2年生のはじめもトップグループにいたのに、学業よりもマンドリンやドラムが好きになり、喧嘩の方法を覚え、アウトローのヒロイズムをたのしむ方向にかわってゆくのだ。

何年か経って、日本の平凡な女の生き方は、その結果のぶんだけ、海軍の「しきたり」

にあわないと判定された。

小野少尉候補生は、土浦の教育隊で「海軍のはみ出しもの」になる。もう一人いた。富田である。彼は妾の子であった。土浦から大井へ、大井から館山へ、館山から横須賀の「八幡部隊」へ、小野と富田、二人はいつも「はみ出し候補生」として一緒だった。

八幡部隊に来たときは、訓練もおわって、二人とも偵察学生であった。いつも滑走路のそばのピスト（指揮所）で待機していた。あるとき、富田が小野の傍に来て「なあおい、小野、三途の川ってほんとうにあるんだろうか」と聞いた。

「海軍に来て妙なことをいうようだが、おれは金槌で泳げねえんだ。三途の川は深いのかな。深いと困るな。おれはおばあちゃん子だし、泳げねえし、みんなにはぐれたらどうしよう、そう思っているんだ」

富田は、ぼんやりした声でそういった。小野は答えなかった。答えても「バカ、そうやすやす死んでたまるか」と、戦友の思いを砕く言葉しか出てこない。それを口にするまえに、自分も同じ「おばあちゃん子」として、富田の胸のうかが痛いほどよくわかった。

その富田が偵察機に乗って出たまま帰ってこなかった。小野は未帰還を最後まで信じようとしなかった。「まだですか」「まだ帰りませんか」といいながら、たった一人になるまで、飛行場に立ちつくし、空を眺めていた。壮大な夕焼けだった。細長い雲が橙色から真紅にかわり、紫を帯び、紺から黒に重く染まる中で、小野は立ちつくした。

「だから、おれは夕焼けが好きになれない。美しい、と思うまえに、富田を思い出してしまう。美しければ美しいほどつらいんだ」

青春の被害者はすべて「同期の桜」だ

鶴田は、母の悲しみを背負い、その重さをやはり背中に感じていた富田を背負っている。富田に代表される、青春の被害者としての同世代の思いを背負っている。だから、若い生命を平和な陽差しの中に咲かせることもなく散らせた人間たちは、彼にとってはすべて「同期の桜」であり「痛恨の対象」なのである。彼が軍歌を歌うとき、それは規律と燃焼を愛した青年たちへの弔歌ではなく、徴兵にとられてぶん殴られて、なおかつかばいあい、「俺たちが死ねば国は残るかもしれない」という幼稚で純粋で直線的な思いを抱きしめていた世代への鎮魂歌なのである。

したがって、彼は一度もみずから「海軍予備学生」も「海軍飛行専習生徒」も名乗ったことはない。「予備学生」でいえば第14期生、「飛行専習生徒」でいえば第1期とほぼ同じ頃の任官で、航空隊でも同じ兵舎に居住することが多かった。だから予備学生の会に出席することはあるが、それは呼ばれたから赴く、という態度であって、彼にとっては「13期も14期もあるもんか。みんな、当時は若もの。死ぬことを余儀なくされていた、墓場の青春ではないか」という思いなのである。

略 -----

五十歳で一日七十曲を歌う

略 -----（遺骨収集の為のチャリティで歌う）